

二〇二二年度

第二回 全統高一模試問題

国語 (八〇分)

二〇二二年八月実施

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 一、この「問題」冊子は、30ページである。
- 二、解答用紙は別冊子になっている。（受験届・解答用紙」冊子表紙の注意事項を熟読すること。）
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば試験監督者に申し出ること。
- 四、解答選択型は、二通りある。☐☐☐☐は共通問題、☐☐☐☐は選択問題である。☐☐☐☐のうち、どちらか一題を選択して解答すること。（選択パターン以外で解答した場合は、解答のすべてを無効とする場合がある。）

選択型 コード	選 択 型	問題 番号
1	現代文・古文・漢文型	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
2	現代文・古文型	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>

- 五、試験開始の合図で「受験届・解答用紙」冊子の国語の解答用紙を切り離し、所定欄に「選択型」、氏名（漢字及びフリガナ）、在学高校名、クラス名、出席番号、受験番号（受験票発行の場合のみ）を明確に記入すること。
- 六、試験終了の合図で右記五、の の箇所を再度確認すること。
- 七、答案は試験監督者の指示に従って提出すること。

河合塾

クラス		受験番号	
出席番号		氏 名	

【共通】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 六十点)

環境問題が国際的に登場してずいぶん時間が経ちました。もともと、人間が自然環境に働きかけ、しつぺ返しに **A**、という経験なら、人類はずいぶん前から、積み重ねてきました。例えば、メソポタミア平原は、かつては緑したたる沃野であつたものが、今では広く砂漠になっています。紀元前三千五百年以上前からその地で栄えたシュメール文化は、農業も盛んで、多くの運河を造り、そこから灌漑用水を引いて、農耕に励んでいた形跡が残されています。しかし、地表に水をまき続けると、蒸発現象のせいで、地下の水分が吸い上げられ、それに伴って、種々の塩分が地表に集積します。ポンピング現象とも呼ぶようですが、その結果、地表は、植物の育たない荒地地になったと言われます。

東アジアに多い水田は、ポンピング現象を起こし難いという利点があることを、東アジアの人々が知っていたとは思えませんが、畑地よりは、こうした自然への侵襲の程度が低いと言われています。

しかし、もともと、農耕そのものが、自然に対する侵襲であることは間違いありません。自然には畑も田んぼもありません。昭和三十年ころのデータだったと記憶していますが、あなたが最も「自然」を感じる風景は、という質問に、日本人の七十パーセント近くが、「秋、稔^{みゆ}って頭^{こぶ}を垂れた稲穂が、秋風が渡るのに応じて、波だっている」という選択肢を挙げた、ということです。私たちにとっては、それが「自然」に思えるのかもしれませんが、これほど自然から遠い風景もないはずなのです。

¹ こうなると、自然とは一体何なのか、という問いに答えたくありません。しかし、この問いに答えるのは大変難しい。言葉の上だけなら、よく言われるように、漢語としての「自然^{しぜん}」には、老子にユライする「無為自然^a」の思想や、仏教における「自然^じ」があります。前者は、道というのは、作為なく、ひたすらあるがままに任せる、という意味で、今日でも使われ、また後者は、この世界が因縁によって(様々な因果関係から)存在しているのではなく、ただ、そこに存在している、という考え方を示すものと言われています。

他方、古代ギリシャ・ローマではどうだったでしょうか。ギリシャ語では、自然は *physis* という語で表現されるのが普通ですが、この語は、ホメロスの時代（紀元前八世紀後半）には植物が種からハツガ・成長する（その際、基本的には、外からの影響とは無関係に、自力で）ことを意味したようです。そこから、「自ずから成長すること」という意味に一般化され、自然を意味するようになったと考えられます。このように見てくると、古代中国の「自然」と、古代ギリシャ・ローマの「自然」とは、意外に近い概念であるように思われます。つまり、「何となく、成り行きに任せて、変化していく」というような意味合いが、共通に感じられるからです。

こうした「自然」という概念と一線を **B** のが、ユダヤ・キリスト教的な自然観でありましょう。言うまでもなく、ユダヤ・キリスト教の自然観の出発点は、旧約聖書の「創世記」です。そこには、創造主である神が、この世界を六日間で「造った」ということになっています。自然が造られたものであるならば、しかも、全知全能である神によって造られたものであるならば、自然は、創造者である神の計画に従って動くことにならざるを得ません。自然界や人間界の「秩序」は、神が「かくあれ」と命じた結果である、というわけです。

しかし、もう一つ、「創世記」には、重要な件があります。神は、この世界のすべてをしつらえたうえで、人間を創造しますが、その後、人間に向かって「この地上の世界を支配しなさい」と告げます。「創世記」の第一章では、人間は神自身に「似せて」造られたと書かれており、また第二章では、神の息吹を鼻から吹き込まれた、と書かれています。このような造られ方をした被造物はほかにありません。つまり人間は神の分身に近い存在なのです。神の理性を、少なくとも一部は「息」によって吹き込まれており、神の計画を理解できる存在として、措定されているとも言えます。

すでに見ましたように、農耕社会であれば、人間はかなりの程度自然に手を加え、管理しようとしています。無論、キリスト教社会ばかりではありません。そしてメソポタミア平原などでは、農業が自然を破壊したことは明白な事実です。しかし、近代科学・技術文明が、農業とは異なった形で、自然破壊を齎^{もたら}していることもまた、明白な事実でありましょう。このへんを ² どのように読み解いていったらよいのか。

一つには、ヨーロッパで十八世紀以降に生まれた「文明」という概念が、鍵を握っているように思います。³「civilization」という語は十八世紀に誕生したのですが、言葉としては「civil」化する」という意味ですね。「civil」とは何か。「都会」あるいは「都会の人間」（市民）というような意味があります。では「civil」化されるべきものは何か。何よりも先ず、人間の管理の手が行き届いていない「野生」の自然でしょう。それまでは、なるほど神によって管理を託されたとは言っても、人間の上になに神という存在がクンリンしていました。しかし、十八世紀啓蒙主義は、この構造を破壊し、人間理性が至高の位置を **C**、と宣言し、人間の上位にあるという神を否定し去りました。もはや人間を制御するものは、人間理性以外にはない。これが、啓蒙主義の中心的思想でありました。だからこそ、人間の手の入っていない野生の自然は「悪」になったのです。しかし、「civil」化すべきものは、まだほかにもありました。一つは社会的存在としての人間です。この時期は、いわゆる「市民社会」に移行する兆しが顕著になった時代です。貴族でもなく、農奴でもなく、また職人でもない、一人一人が平等の権利を持った市民層が勃興する時代です。そして、そうした意識を持たず、近代社会の担い手として充分な力を備えていないような人々もまた、「civil」化されるべきものとして措定されたように思います。

さらに哲学的な領域に入れば、人間の持つ「自然的要因」、つまり性欲、食欲、あるいは征服欲のような、動物的、あるいは本能的な要素もまた、人間の理性によって、手なずけられ、管理され、つまりは「civil」化されなければならないものでした。

つまり、幾重にも重なる対象に対する、こうした人間理性による徹底的な管理が行き届くことが、「文明」なのであり、文明社会であることになります。言い換えれば、人間を束縛するものは、人間理性以外にはあり得ない。自然に対しても、人間自身に対しても、主人たり得るのは、人間（理性）のみである、というテーゼこそが、近代ヨーロッパ社会を基礎づける根源的理念になりました。近代科学・技術文明が、自然管理を徹底しようとして、かえって自然の破壊に進んでしまった理由も、そこにあるのでは、と私は思っています。

最近、特に生物資源を大切にしよう、ということが国際的に強く主張されるようになりました。⁴日本でも、トキの、種と

しての再生に、大きな努力と資源が費やされてきました。それはそれで、重要なことだと思いますが、現在の状況を見れば、「自然」としてのトキという種は、すでに絶滅していると判断して差し支えないと思います。そして長い自然の歴史のなかには、絶滅した種は、山ほどありますし、それ自体自然なことなのです。トキを何とか保存しようとしているのは人間で、これも実は自然に対する人間の介入なのです。

レイチェル・カーソンの『沈黙の春』は、様々な社会的な反対にもめげず、あえて化学物質の自然への脅威を説いた、環境問題の聖書の如き受け止め方がなされています。その価値を尊重することにおいて、私も人後に[D]ものではありませんが、彼女が、生物学的手法（特に「害虫」の雄の不妊化を利用したクジヨ方法）を絶賛していることは、あまり指摘されません。生物多様性を主張し、自然には害虫も益虫も存在しない、と言いつつも、しかし、痘瘡の病原体が地球上から消えた（ように思われる）ことの価値を否定する人はいません。

ここで、そうした矛盾を矛盾として非難したり否定したいものではありません。ことほど左様に、環境問題というのは難しいのだ、ということを書いたかったです。少なくとも私たちは、こうした難しさをネットウに置き、一つ一つの問題に、様々な観点から検討を加えつつ、そのときに〈better〉と思われる解を選んで進むよりはかに途はないのでは、と思います。〈better〉と言ったのは、このような領域には〈best〉はないからです。〈best〉と思い込むことによって、次の段階で〈better〉が見えても、なかなかそちらにシフトができないのが人間の常だからです。今の段階で、精々〈better〉と思われるのだから、という程度の判断で、解を探し実行する、これが望ましい態度ではないかと思うのです。

（村上陽一郎『あらためて学問のすすめ』）

（注）○civilization……文明。

○テーゼ……命題。論題。

○レイチェル・カーソン……アメリカの女性海洋生物学者・作家（一九〇七―一九六四）。

○痘瘡……痘瘡ウイルスによる感染症。天然痘。感染性が強く、死亡率も高いが、種痘によって予防できる。一九八〇年WHOが絶滅宣言を出した。
○シフト……移行。転換。

問一 傍線部a～eのカタカナを漢字に改めよ（楷書で正確に書くこと）。

問二 空欄A Bに入れるのに最も適当な語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ

ものを繰り返し選んではならない。

ア 陥る イ 画する ウ 遭^あう エ 越える

オ 落ちる カ くらう キ 昇る ク 占める

問三 傍線部1「こうなると、自然とは一体何なのか、という問いに答えたくります」とあるが、古代中国における自然観

（前者）と古代ギリシャ・ローマにおける自然観（後者）との説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 両者とも、意図的に造られた秩序を持つ自然という観念とは無縁であり、そこでは自然は何となく成り行きでそうなたものだと考えられていた。

イ 前者では、自然を道徳や宗教と結びつけて捉えていたが、後者では、それに加えて自然は自ずと成長し変化するものとしても捉えられるようになった。

ウ 両者とも自然を宗教と結びつけて考えていたが、自然に計画された秩序を見出していたかどうかという点では、両者の間に多少の違いがあった。

エ 前者では、自然は因縁によって成立するものと考えられていたが、後者では、自然は外部の影響とは無関係に成立し

たものと考えられていた。

オ 前者が一般化されて新たな意味を付与されたものが後者だが、ともに自然を何となく変化していくものと見なしている点では共通していた。

問四 傍線部2「このへんをどのように読み解いていったらよいのか」とあるが、筆者は「どのように読み解いて」いるのか。

筆者の見解を説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 古い時代の農耕社会においては、人間は自然に対して最小限にしか手を加えていなかったが、近代になって科学や技術文明を手に入れると、人間は自然に対して必要以上に手を加えるようになり、そのため、これまでにはなかったほど自然が破壊されるようになった。

イ 文明という概念がなかった時代には、人間を取り巻く環境は管理することのできない野生の自然と見なされていたが、ヨーロッパにおいて文明という概念が成立したことにより、自然は野生のものではなく管理しうるものと見なされ、大規模に破壊されるようになった。

ウ かつての農耕も自然を侵す行為ではあったが、ヨーロッパ近代において神が否定され理性が絶対化されるようになる、人間はその力を野放図にふるって自然を徹底的に支配しようとするようになり、その結果、かつてなかったような自然破壊が進行するようになった。

エ 伝統的な農耕においても人間は自然に対してかなりな程度に管理の手を加えていたが、近代科学や技術文明が発達すると、自然は、管理されるだけでなくときには不要なものとも見なされるようになり、そのためにかつてとは異なった形での自然破壊が行われるようになった。

オ 近代以前においては、どんな農耕社会でも人間は神からその意志を託された存在として自然を管理していたが、ヨーロッパにおいて神が否定されてしまうと、人間は自分たちの理性の力だけで自然を管理しようとするようになり、大規

模な自然破壊が生じることになった。

問五 傍線部3「ヨーロッパで十八世紀以降に生まれた『文明』という概念」とあるが、「文明」化するとはどういうことか。本文に即して五十字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問六 傍線部4「日本でも、トキの、種としての再生に、大きな努力と資源が費やされてきました」とあるが、筆者が「トキ」の話題を取り上げた意図についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア トキが絶滅しようとしているのはそれ自体自然なことであるにもかかわらず、自然保護の名のもとでトキを保存しようとする人間が自然に介入しているという例を取り上げること、自然保護運動が、自然に介入し、管理を徹底しようとして、かえって自然を破壊しているという矛盾を抱えていると批判しようとしている。

イ 自然を守ろうとしてトキを保存しようとしたものの、結果的には失敗に終わったという例を取り上げること、自然保護や環境問題の難しさを浮き彫りにしながらも、環境問題が存在する以上、一つ一つの問題に様々な観点から検討を加えて、常に最善の解決策を見出し、実行するしかないということを示そうとしている。

ウ 生物資源の保護のためにトキを保存しようとした例を取り上げること、人為の介入こそが最良の途だと思い込み、新しい状況に柔軟な対応ができなかったことに失敗の原因があることを示し、自然に人為を加えずに自然のままに放置することが時として自然保護の有効な手段となりうることを訴えようとしている。

エ 自然を守ろうとしてトキを保存しようとする行為自体が、人間の自然への介入になるという例を取り上げること、自然保護という概念に含まれる矛盾や、環境問題の難しさを明らかにし、環境問題においては、一つ一つの問題を多角的に検討し、よりよい解決策を模索し続けるしかないということを主張しようとしている。

オ 本来、ある生物種が絶滅すること自体自然なことであるにもかかわらず、自然保護の名のもとでトキという種を保存

しようと人間が自然に介入しているという例を取り上げること、自然保護運動が、その主張に反して、結果的に人間の自然への介入になつてゐるという矛盾を抱えてゐると非難しようとしている。

問七 筆者の考えに合致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 近代科学・技術文明が成立するはるか昔から、人間は自然に手を加へ管理しようとしてきたが、そうした行為を改めていくことが、環境破壊の進んだ現代では求められている。

イ 人間にとって自然環境への干渉は必要不可欠な行為であり、そうしたことへの自覚なしに環境問題について論じて、不毛な結果しかもたらされないと思われる。

ウ 農業は多かれ少なかれ自然を破壊するが、東アジアの人々は、水田が畑地に比べ自然への侵襲の程度が低い点を評価して、水田耕作を主流とする農業を営むようになった。

エ 環境問題においては、生物多様性を重視し、多様性を損ねることを悪とする主張がしばしば見られるが、そうした主張の背景には、人間の被る利害に対する無関心さがある。

オ 日本人の多くは、厳密には自然とは言えない「稔って頭を垂れた稲穂」に自然を感じるが、それは、そうした光景が自然破壊のなかつた農耕社会から受け継がれてきたものだからである。

国語の問題は次の頁へ続く。

【共通】

次の文章は、佐江衆一「客」の一節である。紺野の両親は高齢で病気を抱え、二人だけで暮らすことが難しくなったため、まず長男である紺野が、妻（章子）と子どもたちとで暮らしている家に、三ヶ月のあいだ両親を引きとることになった。そうした紺野は、昔のことを回想している。これを読んで、後の問に答えよ。（配点 五十点）

叔父の家へきていた幾組もの疎開者たちが東京へ引きあげていき、紺野たち一家だけがとり残された。父は東京へもどる気はないらしかった。近くの町に土地を求め、家を建てて、古物商でもやってのんびり暮すことを考えていたらしい。近くの村の生れであった父は、人生の最後の数十年を、故郷の風景のなかで過したかったのだろう。戦争中に群馬の町家へ嫁いでいた姉のもとから送られてきた材木を父は蚕室の横へ積みあげ、毎朝出勤前に柱や垂木の一本一本を手で撫でては、その生活設計を紺野に話した。

翌年の春、紺野が県立中学へ入学したときも、材木はそのままであった。奥座敷から蚕室の屋根裏部屋へ移ったのは、おそらく叔父夫婦になにかいわれたためであつたろう。叔父はいつまでもでていかない紺野一家に迷惑していたのだとおもう。「材木を見せびらかして、出ていくふりだけをしている」と叔父が叔母と話していた言葉を紺野も耳にした。母は、叔父の家の風呂には入らず、隣家のしまい湯をもらいにいくようになった。風呂のことで、叔母が母にひどいことをいったとかで、母は叔母をひどく憎んでいた。

少年であつた紺野には、なぜ血縁者たちが反目しあうのか理解できなかった。母と叔父は、自分と妹のように仲のよいはずであつた。しかし争いがあると紺野は父と母の肩をもった。その頃は毎日が息をとめているような生活であつた。絶えず母屋の叔父一家をうかがい、びくびくして、それ故に紺野の家族は陰気な共和の輪を強くしていた。

父が役場の役得でたまにパイナップルの罐詰を入手してくることがあつた。供米奨励の褒賞品を胡麻化してくるのである。紺野たちは夜が更けてから蚕室の屋根裏部屋で音をたてないように食べた。ブリキの罐にフオークがあたると意外にひびく大

きな音がする。パイナップルのみずみずしい輪切れをひとつひとつ注意深くとりだして順に食べながら、父と母は叔父夫婦を低い声でののしった。

紺野の家族は、貧しさと辛い生活^{つら}のなかで、しっかりと結ばれていた。その耐えて過した一刻一刻が、自分たちだけをかばいあう排他的な感情を育てていったのであろうか。章子が非難する紺野の性格の一面は、そうして過した少年の一時期に形成されていたのかもしれない。

しかし、その頃は彼にとって父と母に愛情しか抱いていなかったなつかしい日々でもあった。

父には十日に一度ほどのわりで役場の宿直があった。その日は、夕食と翌朝の朝食を母が二つの弁当箱につくり、役場の終業時間後に届けるのである。一里^{いちり}以上の畠道^{はたけみち}を紺野が自転車でもっていくこともあったが、母が徒歩で届けにいく方が多かった。ある晩、母の帰りが遅く、心配になった紺野は迎えにでたことがあった。紺野はハンノ木の黒い影を目じるしに、畠道の

彼方の闇を眺めた。すると行手の闇の彼方から若い女の歌声が近づいてきた。まるで幼い少女が声をおもいきり張りあげて歌っているように、赤いリングに唇^{くちびる}よせて……と時には思い入れたっぷりに、時には品^{しな}をつくった歌声が近づいてくる。歌っている人の足どりが見えるようなきうきとした調子であった。それは母の声であった。

いま想いかえしてみると、母は宿直をしている父のところへいき、叔父夫婦や紺野たちのことを全く気にせずに父と二人だけの自由な時間を愉^{たの}しんできたのであったろう。正月にとった写真のうっとりした母の表情は、やはり日直であった父のところからもどった後だった。

母の一生のうちで若さの残っていた最後の時期であった。

紺野は母を美しくおもい、そして尊敬していた。母のよろこびは彼のよろこびであった。

終戦の翌々年の秋、巨大な台風が関東地方を襲い、川の堤防が到^{いた}るところで決壊した数日後に、紺野の一家は叔父の家をでて新しい町へ移っていった。

母が希望していたように東京へはもどれなかったが、姉の夫の世話で群馬県に近い町に父の職がみつかり、その工場の地つ

づきにわずかな土地を借りて十坪ほどの小さな家が建てられたのである。

新しい住いの近くには小学校があり、その向うを鉄道が通っていた。引越してきた晩、四人は闇をさぐるようにして暗くて広い校庭を横ぎり、踏切りをわたって、燈火のきらめく商店街へ入っていった。

八百屋の店先には、明るい幾つもの裸電球に照らしだされて、鮮い果実がならんでいた。色彩ゆたかな果実の肌理は眩しいほどに美しく、紺野はびっくりしてその輝きを見つめていた。彼はいままで果実がそんなにも眩しく内面からひかり輝くものであるとは知らなかった。もう辛い生活は終って、父と母と幼い妹と四人で誰にも気がねせずに暮せる生活がそこにあるのだ、という確信とよろこびが紺野をとらえた。紺野たちはリンゴと梨を買ってもどった。

四人は、まだ粗壁のままの、畳は叔父からもらった古畳を敷くと二畳分ほど足りなくて床板のむきでたままのバラック建ての家に、それでも木の香の匂う新しい部屋すまの中央にむきあって坐り、果実を食べた。誰も喋しゃべらなかった。果実を嚙かむ音だけがさくさくと聞え、父も母もわざと音をたてて食べているようであった。

「ああ、おいしい、おいしい」

と母は子供のようにつた。「気がねせずに食べられるってことは、こんなに幸福なことなんだろうかねえ」

四人は果物をたらふく食べ終ると庭先の栗りの木を眺めた。美しい星空を背景に実をつけた栗dの梢が見えた。

間もなく工場に製材の鋸のこぎりがすえつけられ、木工の旋盤もどき、ブナの巨木も貨車でついて、試運転を開始した。紡績工場へ納入する糸まきを製造する仕事で、チョビ髭ひげをはやした社長と、総務部長の肩書をもらった父と、生産部長の男のほかは、若い男子工員が一人と女事務員が一人という会社であった。生産部長になった男は満州からの引揚者ひきあげしやで、製材や木工の専門家ということであったが、そのへんのことに多少くわしい器用な男というだけであったろう。父も手伝って製材は順調に進行したが、旋盤がうまく使いこなせず、完成品はいつになってもできなかった。

半年ほどで工場は閉鎖され、人手にわたった。結局、紡績会社の規格にパスする製品ができず、出荷されずに終わったのであ

る。ブナ材をマキにして売ること、父や生産部長の月給は支払われたらしい。

父が東京の土地を売ったのはその頃であつた。値上がりしていたとはいえ、猫の額ほどの坪数であつたから、たいした額ではなかつたろう。父は生産部長にそそのかされて、その金を数倍にすることを考えた。物さえ買えば儲かる時代であつた。父は全額をつぎこんで真綿と板裏草履を買ひ込んだ。真綿は東北や北海道にもつていけば数倍の価格で売れるということであつたし、板裏草履は工場の多い町で引っぱりだこに売りさばけるという話であつた。

隙間風のひどい紺野の家に、真綿と板裏草履がうずたかく積まれた。父は、これで大儲けができるといった。

北海道へは生産部長がいくことになり、彼は数日後旅先から全部売れたと電報をうってきたので、紺野も手伝つて真綿の包みが貨車で積みだされたが、生産部長はいつになつてもどつてはこなかつた。家族も間借りしていた長屋から姿を消していった。父は騙されたのである。

板裏草履の巨大な包が、数か月も売れずに残つた。長年、質屋を地味につづけてきた父に、戦後の混乱に乗じて富を築くなどという才覚はなかつたのだ。

板裏草履から発する甘ずっぱい木の匂いと草の匂いの漂う部屋で、父はわずかな空間に柱に背をもたせかけてうずくまり、終日ぼんやりとしていた。

「早く売ってきなさいよ」

母がヒステリックになると、父と母はいい争いになつた。

「あんたの甲斐性がないから、こんな暮しをしなければならぬのよ。みんなあんたのせいだ。米櫃のなかをのぞいてごらん。あしたのお米をどうするのさ」

「おれは一生懸命やっているんだ。米ぐらいお前がどうにかしてこい。愚痴ばかりならべていないで、自分も働くことを考えたらどうなんだ」

荒縄でくくられた板裏草履の幾つもの包をはさんで、二人の口争いは果てしなくつづくのである。

夜を待つようにして、母との争いに疲れた父は風呂敷包を軀からだにかくしてでていく。質屋へいくのであった。昔、店の前を幾度も往復していた男が、れんをくぐって店へ入ってきて、父に低い弱々しい声で話しかけ、着古した衣類を風呂敷包からとりだす光景を紺野は覚えていたが、その客のように父は風呂敷包をかかえて足音を殺してでていくのだった。

金が入ると父は酒を飲んだ。それまではほとんど飲まなかった父が、量も多く飲むようになった。⁴元来酒の好きな母が相手をし、二人は酔うと親類の悪口をいい、誰も自分たちを助けてくれないと非難した。

その頃、紺野は日曜日には必ず自転車で十二キロほど離れた隣県の姉の家へ食糧をもらいにいくのが常であった。紺野が途中の部落をとおるぬけていくとき、たいてい「素人のど自慢」がラジオから流れていた。あのやけに楽天的な放送が流れているとき、彼はみじめな気持と腹だたしさをかかえて自転車のペダルをふんでいた。

父と母を卑しい人間へと追いやったものは、戦後のあの貧しい、みじめな辛い生活であつたらうか。

いまなら紺野は当時の父と母の投げやりな気持が理解できるのである。あらゆることがうまくいなくて、人生に意欲も希望も失い、ただ流されるような生に甘んじる、疲れた人間のたどりつく耐えがたい気持を、彼は自分のこととして感じはじめている。が、当時の紺野は、生きることによって疲れて精神も貧しく醜みにくくなってしまった父と母を、軽蔑し非難することに精いっぱいであつた。彼は貧しさを憎み、尊敬できぬ父と母をもっている寂しさに、腹をたてた。

そして父と母を、一人前の男の目で嫌悪しはじめていた。

しかし、貧しかったが故に、両親と間違いなく共有してきた涙のほどなつかしい時間が、誰にも介入を許さない愛情を育ててきたのである。それは、章子にはわからないことであつた。

——寝床に横たわってラジオを聞いている父と母の年老いた貧相な顔を、独立した息子の抱く一種の哀れみと、何かに脅おそえられているような嫌悪の気持で、紺野は眺めつづけていたのである。

(注) ○しまい湯……全員が入ったあとの風呂の湯。

○供米奨励の褒賞品……戦中・戦後の食糧難のなか、政府の求めに応じて米を差し出すことでもらえた物品。

問一 傍線部 a ｾ d の漢字の読みを、ひらがなで答えよ。

問二 傍線部 X・Y を言い換えたものとして最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

X そののかされて

- ア 言いくるめられて
イ まんまとだまされて
ウ おどかされて
エ その気にさせられて
オ ふりまわされて

Y 甲斐性

- ア 将来に対する計画性
イ 人を見る目
ウ 生活を成り立たせていく力
エ 失敗から学ぶ能力
オ 要領の良さ

問三 傍線部1「陰気な共和の輪を強くしていた」とあるが、紺野の家族が「陰気な共和の輪を強くしていた」とはどういうことか。八十字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問四 傍線部2「ある晩、母の帰りが遅く、心配になった紺野は迎えにでたことがあった」とあるが、この時の出来事について説明したものとして誤りを含むものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 母の帰りが遅いことを心配してわざわざ迎えに出るほど、紺野は母のことを大切に思っていたが、当時の母は紺野の目から見ても十分に美しく、誇らしく思える存在だった。

イ 紺野は、歌を歌いながら帰ってくる母と途中で出会ったが、あまりにも楽しげなその様子に、心配して迎えに来た身としては、好意が無にされたような寂しさを感じずにはいられなかった。

ウ 母を迎えに行った紺野は、途中で耳にした、幼い少女が声を張りあげて歌っているような声が、母の歌声であることに気づいたが、そのときの歌声はどこかまめかしさを感じさせるものだった。

エ この時に紺野が見た母は、夫を愛する若く魅力的な妻としての母であったが、こうした姿は、紺野が後に目撃することになる、口汚く夫と言い争う母の姿とは極めて対照的なものだった。

オ 母は宿直の夫に弁当を届けに行ったのだが、そこで母は、誰の目も気にすることなく夫と二人だけの時間を過ごすことができるのであり、そのことの喜びを母の歌声は雄弁に物語っていた。

問五 傍線部3「父も母もわざと音をたてて食べているようであった」とあるが、こうした行為を導き出すことになる出来事がエピソードのかたちで描かれている段落はどこか。その段落の冒頭の五字（句読点や記号も字数に含む）を抜き出して答えよ。

問六 傍線部4「元來酒の好きな母が相手をし、二人は酔うと親類の悪口をいい、誰も自分たちを助けてくれないと非難した」

とあるが、この時の紺野の気持ちを説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分たちを助けてくれるものは誰もいないという両親のかなしみを理解しようと頭では思っているものの、いまの生活の締めさばかりが気になり、両親を思いやる気持ちを失いがちになっている。

イ 信頼していた人物に裏切られたことを契機として家族が転落の一端をたどっている状況をうらめしく思う一方、そうした状況を変える力をもたない自分をふがいなく思う気持ちを禁じえずにいる。

ウ 父の事業の失敗によって貧しい生活を送らざるをえなくなってしまったことで父をひそかにうらみに思う一方、美しかった母が生活に疲れ荒んだ様子を見せるようになったことに憐れみを覚えている。

エ 両親がかつて世話になった叔父一家のことをあしざまに言うことに割りきれない思いを抱くと同時に、貧しさこそが両親を変えてしまった原因なのだと考え、生きることのはかなさをしみじみとかみしめている。

オ 酔ってはくだを巻き身勝手なことを言っただけで、両親の醜態をさげすむとともに、そうした両親をもち、貧困にあえぐような生活を送らねばならないことに憤懣^{かんまん}やるかたない思いを抱いている。

問七 本文の表現・内容についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 戦後まもない頃、紺野一家を襲った悲惨な出来事が克明に描かれているが、そのときの紺野の気持ちだけでなく、現在の紺野の気持ちもあわせて紹介されており、そのことで現在の彼の生活の平穏さが強調されている。

イ 疎開先では心一つにして困難に耐えてきた紺野一家が、自由を得た途端、家族の心がバラバラになってしまうという皮肉な現実が描かれており、そのことで人間存在の逆説的なありかたが巧みに表現されている。

ウ 章子の言葉は、彼女の口から直接語られるかたちにはなっていないが、紺野自身も意識している彼のありようをその外側から指摘したものであり、そのことにより作品に奥行きがもたらされるといふ効果が生まれている。

エ 戦後すぐの混乱した状況のなかで紺野一家が苦難を乗り越えていく姿が描かれると同時に、現在の紺野が妻章子との間にかすかな不和を抱えていることが暗示されており、そのことによって作品に広がりをもたられている。

オ 戦後の貧しい生活のなかでのさまざまな出来事が紹介されると同時に、その時々々の紺野の気持ちも描かれており、そのことによって、紺野が次第に自分のなすべきことを自覚していく様子が明らかにされている。

国語の問題は次の頁へ続く。

【共通】

次の文章は、江戸時代の儒学者室鳩巢の随筆『駿台雑話』の一節で、文中の「翁」とは筆者鳩巢自身のことである。これを読んで、後の問に答えよ。(配点 五十点)

忍が岡のあなた谷中の里に、何がしの院として一つの真言寺あり。翁、いとけなかりし頃、その住僧を知りてしばしば寺に行きつつ、木の実拾ひなどして遊びしが、住僧、かたへの人に向かひて、前住の時の事をなむ語りしを聞き侍りしに、寛永の頃の事になむ、將軍家、谷中わたり御鷹狩のありし時、御徒歩にて、ここやかしこ御過ぎがてに御覽ましましたけるが、この寺へもおもほえず渡御ありしに、折節、その時の住僧、はや八旬に及びて、庭に出でて、みづはぐみつつ、手づから接木して居けるが、御供の人々おくれ奉りて、御側に二人三人つき奉りしを、なかなかやむごとなき御事をば思ひ寄らねば、そのまま背き居たりしを、「房主、何事するぞ」と仰せられしを、老僧、心にあやしと思ひて、いとはしたなく、「接木するよ」と御いらへ申ししかば、御笑ひありて、「老僧が歳にて今接木したりとも、その木の大きになるまでの命も知れがたし。それにさやうに心を尽くす事不用なるぞ」と上意ありしかば、老僧、「御身は誰人なれば、かく心なき事を聞こゆるものかな。よく思うて見給へ。今この木ども接ぎておきなば、後住の代に至りていづれも大きになりぬべし。しからば林も茂り寺も黒みなむと、我は寺の為を思うてする事なり。あなたがちに我一代に限るべき事かは」と言ひしを聞こしめして、「老僧が申すこそ、げにもことわりなれ」と御感ありけり。そのほどに御供の人々追追来たりつつ、御紋の御物ども多く集ひしかば、老僧、それに心得て、大きに畏れて奥へ逃げ入りしを、御召し出だしありて物など賜りけるとなむ。

今、翁も、この老僧が接木するごとく、老朽ちぬれども、ある限りは旧学を究めて、人にも伝へ書にも残して、後世に至りて正学の開くる端にもなり、この道の為に万一の助けともなりなば、翁死してもなほ生けるがごとし。古人の所謂死しても骨朽ちじと言ひしこそ思ひあたり侍れ。いささか我が身の為にはかるにあらず、諸君も翁がこの心を信じ給へかし。

(注) 1 忍が岡……現在の東京都台東区上野の辺り。 2 真言寺……真言宗の寺。 3 住僧……寺の住職。 4 前住……前代の住職。

5 寛永……江戸時代の年号。 6 將軍家……江戸幕府の三代將軍である徳川家光のこと。

7 鷹狩……飼いならした鷹を放して獲物を捕らえさせる狩獵。 8 八旬……八十歳。 9 みづはぐみつ……年は取っていないながらも。

10 房主……寺の住職。 11 上意……將軍のお言葉。 12 後住……後代の住職。 13 御紋……徳川將軍家の紋所である葵の御紋。

14 となむ……ということだ。 15 旧学……従來の學問。

問一 波線部 a 「いとけなかり」・c 「やむごとなき」・d 「大きに」を、それぞれ終止形に改めて記せ。

問二 二重傍線部①「聞き侍りし」・②「背き居たりし」・③「聞こしめし」の主語として最も適當なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 翁 イ かたへの人 ウ 將軍家 エ 御供の人々 オ 老僧

問三 傍線部 1・2・4 の意味として最も適當なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

1 「おもほえず」

ア たまたま イ ししぶ ウ 不意に エ 内密に

2 「はしたなく」

ア さりげなく イ しかたなく ウ 即座に エ 無愛想に

4 「ことわりなれ」

ア みごとだ イ もっともだ ウ 意外だ エ 強引だ

問四 波線部 b「おくれ」・ e「見」・ f「老い」・ g「侍れ」・ h「信じ」について、

(1) それぞれ終止形に改めて記せ。

(2) 活用の種類を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。(同じ記号をくり返し用いてもよい。)

ア 四段活用 イ 上一段活用 ウ 上二段活用 エ 下一段活用

オ 下二段活用 カ カ行変格活用 キ サ行変格活用 ク ナ行変格活用

ケ ラ行変格活用

問五 傍線部 3「あながちに我一代に限るべき事かは」の表す内容として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 接ぎ木を大きくすることを自分だけの功績にするつもりはまったくないということ。

イ 必ずしも自分の生きている間に接ぎ木が大きくなってもかまわないということ。

ウ 大きくなった接ぎ木を自分の生きているうちになんとかして見届けたいということ。

エ この寺の代々の住職は誰もがみな接ぎ木をしなければならないのであるということ。

問六 傍線部 5「大きに畏れて奥へ逃げ入りし」とあるが、老僧はどうして奥へ逃げ隠れたのか。その理由を三十字以内(句読点等を含む)で説明せよ。

問七 傍線部6「この心」の内容を説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 一生をかけて学問を続けると後々評価されると考えている。
- イ 老いても学問に励むのは後の世のためであると考えている。
- ウ 学問に志すのは年老いてからでも遅くはないと考えている。
- エ 努力し続ければ正しい学問に到達できるのだと考えている。

【四】【現・古・漢型】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（設問の都合で、返り点・送り仮名を省略したところがある。）（配点 四十点）

子産者^は、子国^{ナリ}之子也。子産忠^{ナリ}於鄭君^ニ。子国譙怒^{セメテ}之曰、「夫介^{シテ}異^ニ於人臣^ニ、而独忠^{ナリ}於主^ニ。主賢明^{ナラバ}、能聽^ク汝^{ナンヂニ}。不^レ明^{ナラ}、将^ニ不^{ラント}汝聽^カ。聽与^レ不^レ聽、未^レ可^ニ必知^ニ。而汝已離^ル於群臣^{ヨリ}、離^ル於群臣^{ヨリ}、則^チ必危^ズ汝身^ヲ矣。」

非徒危己也。又且危^{カツ}父矣。」

（『韓非子』による）

（注）○子産……人名。春秋時代の鄭国の宰相。

○子国……人名。

○忠……忠実に仕える。ここでは、主君のあやまちを積極的に諫めること。

○鄭君……鄭国の君主。

○介異……孤立して他と異なる態度を取る。

問一 波線部 a 「能」・ b 「已」・ c 「則」の読みを、平仮名で記せ。(現代仮名遣いでもよい。)

問二 傍線部 1 「不_レ明、将_レ不_ニ汝_一聴」を現代語訳せよ。

問三 傍線部 2 「聴_レ与_レ不_レ聴、未_レ可_ニ必_一知」を平仮名ばかりの書き下し文に改めた場合、どうなるか。次の空欄 A (一字)・

B (三字)・ C (四字) を補うべき平仮名をそれぞれ記せ。

きくときかざる ^A□は、^B□□□かならずしもしる^C□□□□。

問四 傍線部 3 「非徒危_レ已也。又且危_レ父_一矣」について、

(1) 傍線部前半「非徒危_レ已也」は、「徒_ただに已を危くするのみに非ざるなり」と読む。この読み方にしたがって、解答欄の原文に返り点を施せ。(送り仮名は不要。)

(2) 傍線部全体の内容として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 子産だけが危機にさらされるのであり、子国は罪をまぬがれるであろうということ。
- イ 子産が窮地に陥るだけでなく、子国までも追い詰められてしまうであろうということ。
- ウ 子産は鄭国の主君の面目をつぶすだけでなく、祖先をも辱しめるであろうということ。
- エ 子産は鄭国の主君の寵愛を得られるが、他の臣下には怨まれるであろうということ。
- オ 子産が身の危険も顧みずに鄭国の主君に尽くせば、子国も安泰であろうということ。

問五 父の子国は、子産にどのようなことを言おうとしたのか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 道徳よりも国家の繁栄を重んじるほうがよい。

イ 人間の本性にはずれた行為をしてはならない。

ウ どんな時でも正しいことはやり通すべきである。

エ むやみに正義を貫けばよいというものではない。

オ 主君に誠意を尽くすことが臣下の務めである。

国語の問題は次の頁へ続く。

【五】【現・古型】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 四十点)

光明山といふ山寺に老尼ありけり。いかなるにや、日吉つきなやまし給ひて、さまざまの託宣ども聞こえける時、ある僧来あひて、尼の身にうちあはず、心づきなくおぼえけるうへ、奈良のかたには、山王いとあがめ奉らぬならひにて、²「ころみむと思ひて、この尼に向かひていふやう、「まことに大明神あらはれ給ふならば、わが申さむこと、はからひのたまはせよ。われ、極樂を願ふ心ざし深く侍り。いづれの行か、必ず往生の業となり侍るべき。このこと凡夫の暗き心に、はからひがたくなむ侍る」と申す。

尼いふやう、「汝、われをころみむとする心ざし、めざましけれども、なほざりにても、往生の業とて問はむこと、いかでか教へざらむ。所詮は、行はなににてもあれ、衆生の宿執、さまざまなれば、仏の御教へもまたさまざまなり。いづれもおろかならず。さして、そのことと定めがたし。信をいたし、功をつむぞ貴かるべき。ただし、このことにいづれの行にも、必ず具すべきこと二つあり。信すべきならば、いはむ」とのたまへば、この僧思ふやう、³「なにごとのことかはと、なほざりがてらにひひ出したりつるを、かくげにげにしく、はからひのたまはするに、貴くなりて、⁴「われ、もとより西方の行者なり。早く承りて、深く信ずべし」と申す。

重ねて教へ給ふ。「このことといふは、慈悲と質直となり。これを具せざれば、いづれの行を勤むとも、⁵往生を遂ぐこと、きはめてかたし」とのたまふ。

僧、掌を合せて、「この二つを具せむこと、かたく侍り。いかがつかまつらむ」と申しければ、「二つ具せむこと、なほかたくは、せめて **X** はおろそかなりとも、**Y** ならむと思へ。心うるはしからずして、浄土に生まるること、いかにもあるまじ」とぞ仰せられける。

(注) 1 光明山……現在の京都府木津川市にあった寺。

- 2 日吉つきなやまし給ひて……「日吉」は現在の滋賀県大津市にある日吉大社のこと。ここに祀^{まつ}られている日吉大明神が老尼に取り憑きなさって、の意。
- 3 託宣……神仏が人のりうつたり夢の中に現れたりして、その意志を告げること。
- 4 山王……日吉大社の別称。
- 5 行……修行。
- 6 業……行為。
- 7 凡夫……悟りに達していない人。ここでは、ある僧自身を指す。
- 8 衆生……生きているすべてのもの。
- 9 宿執……前世から離れない執着。
- 10 信……信心すること。
- 11 功……修行。
- 12 西方の行者……極樂往生を願う修行者。
- 13 質直……正直でまじめであること。

問一 傍線部1・4・6・7の意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

1 「心づきなく」

ア 理解できなく イ 気に入らなく ウ わざとらしく エ おそろしく

4 「げにげにしく」

ア 納得がいく感じで イ 思いやりがある感じで ウ 激しい感じで エ 憎らしい感じで

6 「かたし」

ア 難しい イ 尊い ウ 確実だ エ 当然だ

7 「いかが」

ア どちらに イ どのように ウ どうかして エ どれほど

問二 傍線部2「こころみむ」とあるが、何を確かめようとしているのか。三十字以内(句読点等を含む)で説明せよ。

問三 傍線部3「なにごとのことかは」に示されたある僧の気持ちとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア どのようなことを言われるのかと恐れる気持ち。

イ どのように言い訳するのかと興味津々な気持ち。

ウ たいしたことは答えないだろうと侮る気持ち。

エ 何を教えてくれるのだろうと期待する気持ち。

問四 傍線部5「往生を遂ぐこと」とほぼ同じ内容を記した箇所を、本文中から十字以内で抜き出して記せ。

問五 空欄

X

・

Y

 を埋めるのに最も適当な語を、それぞれ本文中から漢字二字で抜き出して記せ。

